

SNS 利用と人間関係への認知との関連研究

08H2071 寺島圭

1. 研究目的

近年の SNS (Social Networking Service) サイト (以下、SNS と表記) の普及に伴い、その社会的影響力に注目が集まっている。濱野 (2008) によれば SNS とは「サイト内での友人・知人関係の構築 (ネットワーキング) を目的に、プロフィールや友人リストなどを登録・公開するコミュニティサイト」であり、主なものに Facebook や twitter、mixi など存在している。小林・池田 (2006) がオンラインコミュニティに関する研究で示したように、インターネット上の、オンラインでの他者との交流が現実世界における社会参加をも促すことが知られている。こういった研究をうけ本研究では、SNS の利用が現実の (オフラインでの) 人間関係となんらかの相関関係にあると考え、これを質問紙調査によって社会心理学的に検討する。twitter と mixi の利用に焦点を絞ることによって、既存の Facebook が人間関係に及ぼす影響とどう異なるのか、といった点も明らかにする。

2. 調査対象とその属性

弘前大学の 21 世紀教育科目「社会学の基礎」受講者を対象に、質問紙調査を実施した。有効回答数は 370 である。回答者は女性が若干多く (60%)、全体の 90% が学部の 1, 2 年生である。また、一日に 1 時間以上インターネットを利用すると答えた回答者が全体の約 65% を占めていて、回答者のインターネット利用時間は全体的に長めである、と言える。

調査対象者が大学生に限られているという点を考慮すれば、得られたサンプルはランダムサンプルよりもインターネットにより慣れ親しみ、であればオンライン上での対人的な交流により抵抗なく参入できるという属性を有している可能性がある。

3. 仮説と概念

本研究では、以下の仮説を検討した。

仮説 I : mixi 利用の熱心さは、オフライン・結束型 SCS¹ と正の相関をする。

仮説 II : mixi 利用の熱心さは、関係維持型 SCS と正の相関をする。

仮説 III : mixi 利用の熱心さと社交性は、オンライン/オフライン・橋渡し型 SCS と正の交互作用を持つ。

仮説 IV : twitter 利用の熱心さは、オンライン・橋渡し型 SCS と正の相関をする。

仮説 V : twitter 利用の熱心さと社交性は、オフライン・結束型 SCS に対して正の交互作用をもつ。

¹ Williams (2006) が作成した社会関係資本尺度 (Social Capital Scales) を、SCS と表記する。

仮説VI：twitter利用の熱心さと社交性は、オフライン・橋渡し型SCSと正の交互作用を持つ。

以上の仮説に用いられている変数に関して、説明をしていく。

まず「mixi/twitter利用の熱心さ」であるが、これらはEllisonら(2007)がFacebookに関する研究において、その利用の質的な側面を検討する際に用いた変数をmixi、twitter利用にあてはまるように作りなおしたものである。これらは、「1日のmixi/twitterの利用時間」などの量的変数、4件法で尋ねた「mixi/twitterは自分の日常生活の一部だ」などの質的変数をそれぞれ標準化し、加算した合成変数である。これらの操作によって変数の複雑さは増し結果の解釈が難しくなるという問題を抱えることにはなるが、加算した各変数間の内的整合性は十分に高く、少なくとも各SNSを熱心に使っているかどうかの一側面を計測できると考えられる。これらの変数は独立変数として用いられる。

次に「社交性」であるが、これは意識項目として、斉藤ら(2001)の外向性因子に関わる項目を2つ取り出して用いた変数である。この項目の妥当性に関しては、Pavot & Diener(1993)のSWLS(Satisfaction With Life Scales)を「生活満足感」の指標として計測し、これらをまとめて因子分析にかけることによって確認した。

最後に、人間関係をみる従属変数として「社会関係資本尺度(Social Capital Scales; SCS)」を用いる。これは、Williams(2006)がPutnam(2000)における社会関係資本の2分類、「結束型」と「橋渡し型」を尺度として計測することを目的に作った変数である。Ellisonら(2007)はこれらに加えて「関係維持型」のSCSを導入しており、本研究ではこの3つの型に対応するSCSを、オンライン、オフラインそれぞれについて用いている。各SCSについて概念を説明する。第一に「結束型」とは内向きの社会関係資本であり、内集団の忠誠や結束を強化する。第二に「橋渡し型」は外向きの社会関係資本で、外部資源との関係や情報伝播に優れ、より広いアイデンティティや互酬性を生み出すものである。最後の「関係維持型」は、高校時代の友人関係がいかに残存し、またそれに頼ることができるか、ということ計測する概念である。これらの変数の質問項目を、その妥当性ととも因子分析の形で表1に示す。

なお、SCSに関して留意すべき点は、社会関係資本を認知的なレベルでしか計測できないという点である。つまり、本当に結束型SCSの高い人が自身の内集団への忠誠が高いか、橋渡し型SCSの高い人が実際に外部資源への接触を積極的に図っているのか、ということはこの尺度では知ることはできない。しかし、個人の態度や判断がその人自身の行為に対して影響を及ぼすということは社会心理学の多くの議論から肯定できることである。つまり、SCSによって個人の行為を「予測する」ことは、少なくとも可能であると考えられる。

表1 社会関係資本尺度項目の因子分析(主因子法、promax回転)

質問項目	第一因子 (オンライン・ 結束型)	第二因子 (オンライン・ 橋渡し型)	第三因子 (オフライン・ 結束型)	第四因子 (オフライン・ 橋渡し型)	第五因子 (関係維持型)	独自性
インターネット上には私の問題を手助けしてくれると信じられる人がいる	0.78	0.06	0.01	-0.10	0.01	0.36
重要な判断をするときにアドバイスを求めることができる人がインターネット上にいる	0.80	0.02	-0.08	-0.07	0.00	0.36
私とインターネット上で付き合う人は、私の評判を高めてくれるだろう	0.69	0.07	0.03	0.06	-0.01	0.44
インターネット上で人と付き合うことは、私に新しいことに挑戦したいと思わせてくれる	0.32	0.55	0.02	0.05	-0.06	0.40
インターネット上で人と付き合うことは、私に世界の他の場所に対する興味を抱かせてくれる	0.02	0.80	0.07	-0.05	0.06	0.34
インターネット上で人と付き合うことは、私により大きな世界とつながっていると感じさせてくれる	0.10	0.64	-0.06	0.12	-0.01	0.47
対面上の関係で、私の問題を手助けしてくれると信じられる人がいる	-0.03	0.06	0.77	-0.01	0.00	0.42
重要な判断をするときにアドバイスを求めることができる人が対面上の関係にいる	-0.02	0.00	0.77	0.09	0.02	0.31
私と対面上の関係で付き合ってくれる人は、私の評判を高めてくれるだろう	0.29	-0.22	0.14	0.37	0.07	0.64
対面で人と付き合うことは、私に新しいことに挑戦したいと思わせてくれる	-0.02	0.03	0.07	0.78	-0.02	0.35
対面で人と付き合うことは、私に世界の他の場所に対する興味を抱かせてくれる	-0.10	0.05	0.01	0.80	0.03	0.34
対面で人と付き合うことは、私により大きな世界とつながっていると感じさせてくれる	-0.03	0.00	-0.05	0.71	-0.02	0.55
必要な時に、高校時代の同級生に小さな手助けを頼むことができる	0.02	-0.02	0.20	-0.06	0.58	0.51
違う街に旅行する場合、高校時代の同級生の家に泊まることできる	0.01	0.02	-0.02	0.00	0.70	0.53
高校時代の同級生から、仕事やインターネットに関する情報を得ることができる	-0.04	0.05	0.01	0.10	0.60	0.58
因子寄与	2.82	2.31	2.64	2.87	2.41	
因子寄与率	0.38	0.31	0.35	0.38	0.32	

note: n=358

4. 分析の結果

4-1. mixi に関して

分析の結果、まず仮説 I が支持された。この結果は、mixi 内での友人（マイミクシイ）の登録において、インターネット上のみの友人を登録している人数が極端に少ないことを考えると、理由がはっきりする。つまり、mixi において友人関係を結ぶ人というのは対面上の（オフラインでの）友人が大多数であり、この結果、mixi を熱心に利用することとオフラインでの友人関係における結束型の SCS とが相関を示したのだろう。

次に、仮説 II は棄却された。分析において社交性がオフライン・橋渡し型 SCS と正の相関していたことを考えると、社交性の高さによって友人関係を広げていくような傾向が、高校時代の友人関係を維持する効果を上回った結果、仮説 II が棄却されたと考えることができる。この解釈は、調査対象者の多くが学部の 1, 2 年生であったこととも整合的である。すなわち、対象者は大学に入ってまだ日の浅い人が多く、友人関係を広げよう、といった意識の表れがこの結果につながったと考えることもできる。

最後に、仮説 III も棄却された。これは仮説 I と同様、mixi 上の友人がオフラインでの友人関係を引き継いでいるという特徴が関与していると考えられる。普段の友人関係が mixi においても持ち込まれているならば、当然 mixi 上でやりとりされる情報は普段の生活で友人と話すことなどと重複するはずである。であるならば、mixi を熱心に利用することで外部の物事への興味関心が増すということは、あまりありそうにない話である。

4-2. twitter に関して

はじめに、仮説 IV は支持された。twitter を熱心に利用する人ほど外部の物事に対する興味関心が高いという結果は、twitter のサービスとしての目標が果たされていることを意味している。

次に、仮説 V と VI は棄却された。これは、twitter を熱心に利用していかつ社交性の高い人でも、対面上の関係における結束型、橋渡し型の SCS は高くない、と言う結果である。この結果がもたらされた理由は、以下の可能性が考えられる。それは、回答者がフォローしているユーザーの大多数は著名人や自分とは関係のない団体などであり、熱心な利用がオフラインでの各 SCS との相関に結び付かなかったのかもしれない、というものだ。回答者のフォロー対象に関しては推測でしかない。しかし、twitter の利用目的を尋ねた質問項目において「自分一人では得られそうにない情報を得るため」「著名人のツイートを見るため」の 2 項目で有効回答 90 のうち半数の 45 を占めており、この推測にはある程度の妥当性があると考えられる。

5. 考察

Ellison ら (2007) の Facebook 研究においては、本研究で挙げたいずれの SCS とも、Facebook 利用の熱心さが正の相関を示していた。

ただし、本研究において mixi についての分析の結果をしてみると、そうはならなかった。なぜこのような違いが生じたのか。重要なのは、mixi がオフラインでの友人関係を強く引き継ぐという特徴であると考えられる。結局のところ mixi での友人関係は現実の友人関係をかなりの部分で重複を見せるため、オフラインにおける結束型の SCS とは正の相関を示すものの、橋渡し型の SCS とは正の相関が生じにくいのであろう。以上より、mixi は現実の友人関係を強化し内向きの結束を強めると考えられるが、そういった影響を外部へ向かわせる可能性は低いと言える。

twitter に関しては、mixi とは逆に外部に対しての広がりをもたらす可能性が示唆された。またここから、Granovetter (1973) の指摘する「弱い紐帯」を、twitter が提供するかもしれないと考えることが可能である。近年、学生の就職活動に twitter が利用されているというニュースが、このことを示している。ただし、その効果は限定的なものに留まるであろう。なぜなら、弱い紐帯がその効力を最も発揮されるのは外部の他者との間に双方向的なコミュニケーションの可能性が開かれた時である。にもかかわらず、twitter でのフォロワーの多くは著名人や各団体からの情報獲得が主要な目的であることが本研究によって示され、そこに弱い紐帯と言えるほどの関係性が築かれるかどうかには疑問が生じるからだ。

本研究によって示された結果は、ソーシャルメディアが見知らぬ誰かとのつながりを作り、また他者とのコミュニケーションをいっそう容易にする、という理想論的なイメージからは距離を置いたものとなった。本研究のさなか、2011年11月30日に mixi と twitter がサービスにおいて提携し、一方のつぶやきがもう一方へ反映されるようになるなど、両サービスの連携が進んでいる。これにより mixi や twitter の持つ弱点や欠点が相互に補われ、SNS の利用がよりよい社会的帰結をもたらすようになるかもしれない。

参考文献

- Ellison, N, B. et al. (2007). The Benefits of Facebook "Friends:" Social Capital and CollegeStudents' Use of Online Social Network Sites, *Journal of Computer-Mediated Communication*, 12, 1143-1168.
- Granovetter, M. (1973) . The Strength of Weak Ties. *American Journal of Sociology*, Vol. 78, No. 6, 1360-1380. (野沢慎司 (編、監訳)・大岡栄美 (訳) (2006) . 「弱い紐帯の強さ」, 『リーディングスネットワーク論』, 勁草書房, 123-154.)
- 濱野智史 (2008) . 『アーキテクチャの生態系—情報環境はいかに設計されてきたか』 NTT 出版
- 小林哲郎・池田謙一 (2006) . オンラインゲーム内のコミュニティにおける社会関係資本の醸成：オフライン世界への汎化効果を視野に」, *社会心理学研究*, 第 22 卷, 第 1 号, 58-71.
- Pavot, W. & Diener, E. (1993). Review of the Satisfaction With Life Scale. *Psychological Assessment*, Vol. 5, 2, 164-172.
- Putnam, R, D. (2000) . Bowling Alone : The Collapse and Revival of American Community. *Simon & Schuster* (柴内康文 (訳) (2006) . 『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生』 柏書房)
- 齋藤崇子ら (2001) 「性格特性用語を用いたBig Five尺度の標準化」 *九州大学心理学研究*, 第2巻, 135-144.
- Williams, D. (2006). On and off the 'Net: Scales for social capital in an online era. *Journal of Computer-Mediated Communication*, 11, 593-628.